

新しい医療の道を切り開く



「軍国主義的なところがなく、のびのびとしていた」と岡田節人さん

魅せられ、将来の進路が固まった。

京都大学理学部動物学
科を卒業後、英国や米国の
大学にも留学。両生類
の発生などについて最新
線の研究を続けた。粘り
強い研究の末、世界で初
めて水晶体細胞の培養に
成功し、目の色素上皮細
胞が水晶体へ形質転換す
ることを確かめた。

この研究が一つのきっ
かけになり、幹細胞生物
学や再生医療研究につな
がったという。京大教授
として若手の育成にも力
を入れた。「のびのび好
きなことをやってきただ
けです」

日本で初めてバチスタ
(心臓縮小)手術に挑ん
だ心臓外科医の須磨久善
さん(66、68年卒)は中
学2年のとき、医師にな
ろうと決めた。

大学まである一貫校の
ため、当時、ほとんどの
生徒は受験をしなかつ
た。「どの大学に行きた

いか」ではなく、「何に
なりたいか」を仲間と語
り合った。苦手な競争を
せず、「ありがとう」と
言ってもらえる仕事は何
だろうと考え続け、医師
にたどりついた。

まじめに授業を受け、
成績はよかったが、受験
レベルとは距離がありす
ぎた。それを実感したの
が高3秋の全国模試。1
科目が8点だった。さす
がに慌てふためいた。

国語教師に「テストで
満点を取っていたら医学
部に入れますか」と聞く
と、無理だと言う。「で
はもう授業に出ません。
どうしても医学部に行き
たいので自分で勉強しま
す」と宣言。先生も認め
てくれた。

その日から兩戸を閉め
て釘を打ち、自室にこも
った。問題集を積み上げ
て猛勉強し、現役で大阪
医科大学に合格した。

心臓外科医になってか
らは、前例や常識にとら
われず、数々の新しい手
術に挑戦し、患者の命を
救ってきた。これまでに
手がけた手術は5千件を
超える。

「医師になろうと決め
た日から、やめようと思
ったことは一度もありま
せん。『だめだったら』
というセカンドチョイス
をもたないこと。これが
大事だと思えます」

ただ、勉強よりも体育
が大事という価値観が強
かったため、苦勞もした。
「体が弱かった。運動が
苦手な女性にもてなかつ
た」
熱中したのは昆虫採集
だった。生物研究部に入
り、チョウやカブトムシ
から目に見えないような
小さな虫まで、約1万種
を集めて標本にした。部
室でイモリも飼っていた。
た。自然科学の面白さに



「優しさと強さがあれば、患者もスタッフも守れる」と須磨久善さん